

# 生一政治としての教育の構成

— 19世紀イギリス教育史の一側面 —

上野 耕三郎

## 「批判的」教育史

アンディ・グリーンは、その著作『教育と国家形成<sup>1</sup>』のなかで、国家が近代公教育の発展に果たした役割について論じ、中産階級の改革者の考えと労働者階級急進主義者の考えとを対照させて描いている。中産階級の改革者は自らが信奉する自由放任のイデオロギーを、全面的にあるいは部分的にという違いはあったにしても、放棄し、国家が近代公教育を構築することを理論の面からも支えることになった。というのも、高まりゆく階級闘争の熱気と増大する都市の社会不安に直面し、中産階級は教育をすべての社会悪、犯罪や不道徳から治安攪乱や革命的共感にいたるまでの矯正手段とみなしていたからである。また、公教育は中産階級の隠れた経済的利害——規律づけられた従順な労働者の養成——にも合致するとされていたからでもある。このようなイデオロギーを典型的に表現しているものとして、初期の工場査察官であったレオナード・ホーナーの考えが引用されている。

「最下層にある労働者階級の子どもたちをきちんと教育することが、治安問題として強く要求されている。それは無知がもたらした不道徳で不品行な大衆が私たちのまわりで成長し、厄介者や社会に迷惑をかける者になることを防ぐためである。労働者階級の大多数を理性によって統治できるようにするためには、労働者階級の教育が必要である。<sup>2</sup>」

対照的に、労働者階級の教育の伝統はまったく異なった歴史をもっている

ものとして次のように描かれている。その伝統は労働者階級の日常生活に根をおろしており、解放のための闘争に寄り添って成長したものであった。確かに、中産階級と同様、労働者階級は教育に対する楽観的とも言えるほどの信頼を表明してはいたが、異なった教育目的を掲げており、その教育目的に理性の力を結びつけていた。「労働者階級運動は教育を「自然権」とみなし、その世俗的で平等な目的を押し進めるために理性的思考の力を謳いあげた。このプロジェクトの中心には知識を集団で追究することの重要性があった。それは個人が自己実現し完成をみるため (individual self-realization and fulfilment) のものであり、労働者階級の状態を理解するためのものである。それは集団がいっしょに政治的な前進をするために不可欠な前提条件である。」<sup>3)</sup> (傍円強調は引用者、以下同様)

グリーンは、このような教育の伝統を、チャーティストの第一人者であるウィリアム・ラヴェットに見て取っている。というのも、その独学者風な自己教育は労働者階級の教育モデルになったばかりではなく、その著作は同世代のものなかでも最良のものであり、中産階級がけっして見せることのない「精神の寛容さと人間解放への深遠な関わりあい」を示しているからである<sup>4)</sup>。ラヴェットの『教育についての提言』によれば、すべての人の内面には発達の潜在力が秘められており、教育の役割はそれを顕在化することであった。「人は(力を)たいへん賢明にもそして驚くほど賦与されているので、社会の理性的、道徳的、幸せな構成員になる能力をもっている。」「人に知識を与えよ、そうすれば以前には精神の闇が彼から隠していた美しさ、多様さ、卓越した巧妙さ、荘厳さを見つけ、それを享受する光を与えることになる。」教育は「人間の尊厳を増し、自らの存在を喜ぶための普遍的手段」であり、政治的ならびに社会的正義を達成するための強力な武器であった<sup>5)</sup>。このユートピアを実現するために、ラヴェットは当時学校で広がっていた受け身で機械的な学習方法、強制と体罰を激しく批判し<sup>6)</sup>、それに代わって、教育は観察と子どもの理解力の段階的発達に基づき、教室は「生き生きとした関心を引く楽しみ」の場となるべきことを強い口調で主張していた。グリーンのこと

ばでは、ラヴェットは「一世紀後には世間で認められることになる創造的学習の理念」、「自己活動、個人による発見、創造的理解の教育学」を擁護したことになる<sup>7</sup>。

このように編まれた歴史の深層には一つの原理が隠されていた。その原理とは、ラヴェットの場合には「自己実現」する階級という集团的姿をとっていたが、全面的に「自己実現する主体」という倫理的原理である。めざすべきはこの倫理的原理が十全な形で実現された制度であり、その源流は労働組合、「通信協会」、労働者階級急進主義のなかでの独学という活動へと辿ることができる。そのような活動のなかでは、人々は国家や教会の権力から解放たれて、自身を育て上げる自立的な独自の教育形態を展開していたのであり、このような教育の文化や伝統こそがすくいとられるべきなのであった<sup>8</sup>。

他方で、この種の多くの歴史では、倫理的原理と相反する、権力による一方的な目的の押しつけや抑圧が想定されていた。中産階級は自らが手にしている経済権力と政治権力を行使し、主体の「自己実現」という原理を階級利害によってねじ曲げ、抑圧し、近代公教育学校を組織し推進した、とされる。資本主義的生産様式に適合するように、子どもたちに規律を植えつけることで、従順な労働力の供給を可能とし、あるいは現世での服従と来世での救済を教えることで、学校は労働者階級の政治的な力をうち砕き、それらを終末論のファンタジーあるいは単なる個人の道徳向上という欲望へと吸いあげたというわけである。したがって、「批判的」教育史では、労働者階級が抱いていた倫理的原理は、階級利害やイデオロギーなどによってねじ曲げられ、全面的な実現を阻まれ、学校はその一部しか実現されてこなかった、というわけである。当然のことながらその関心は背後で教育や学校を繰っているものへと向けられていく。階級であれ、イデオロギーであれ、はたまた国家であれ、教育や学校を操作するものを探し出し、どの階層が権力を掌握しているのか、彼らのイデオロギーはどのようなものであり、それをどのように用いて教育や学校へと浸透させているのかを探ることへと、その関心は向けられてゆく。ネオ・マルキシストラの「批判的」教育史はこのように近代公教育を

分析し、それが国家主義的であったりキリスト教的であったりしたことを、鋭い鮮やかな切り口で暴いてゆく。彼らにとっては、歴史的に形成されてきた近代公教育は、本来実現されるべき原理がねじ曲げられて反映しているものであった。

「批判的」教育史では、一方では、いまだ近代公教育制度のなかで十全には実現されていないにしても、「自己実現」の能力をもっている人間であれ、階級であれ、主体が前提とされ、他方では、その実現をねじ曲げ、阻む権力のたくらみがある、とされる。近代公教育制度の発展の核にはつねにこの二つの対立が編み込まれ、この二項対立の構図のなかで教育や学校は問題構成されている。もう少し言うならば、私たちが現在目の前にしている教育制度の背後には、「自己実現」であれ、「正義」であれ、「平等」であれ、名称は違ったにしても、先験的とも言うべき倫理的原理が前提とされており、多くの場合、その倫理的原理は障害によって妨げられ、教育制度においていまだ実現しておらず、実現途上にあるものとして描かれている。

「全面的な自己実現」という倫理的原理が階級利害やイデオロギーによって歪められ、近代公教育制度のなかには実現されていないとすれば、この二項対立の図式はどのように解消されるのか。その唯一の解決策は、自身の物質的利害が普遍的で、その教育が理にかなったもので、「有機的」でもあるような、階級の出現に求められる。自己教育を「文化」とする労働者階級は、自らが社会的・経済的に規定されていることと道徳的自由との対立を統一する存在であることが約束されており、労働者階級「文化」の伝統ともいうべき「自己実現」原理が政治的そして倫理的活動に賦与されている。そのようなわば弁証法的存在とも言うべき労働者階級に、そして最終的には歴史に原理の十全なる実現は託されることになる<sup>9</sup>。

繰り返して言えば、「批判的」教育史によれば、歴史的に形成された近代公教育制度は倫理的原理を実現しそこね、理想的モデルへと向かう途上のものであった。「批判的」教育史は、「真正な」教育という名で現実の学校を否定し、現実の底に埋もれている原理を救い出し、歪められた現実の学校の否定

と倫理的原理の実現を「歴史」に託しているわけである<sup>10</sup>。原理はやがては実現されるべきことを「歴史」が約束しているものであり、歴史的に形成された教育制度の底から救い出されてゆく。こうして階級利害やイデオロギーが取り払われ、二項対立が解消された彼方には「完全なる人格」あるいは人間の解放という倫理的目的が燦然と輝き、そのような原理が理想社会のなかで実現された暁には、理想的主体が形成され、そのような主体は外部からの押しつけられた目的や抑圧から解き放たれ、自由を通して学習し、「全面的な自己実現」がはかられ、自身の行動を統制することができるようになるというわけである。

### 系譜学的思考

「批判的」教育史とは対照的に、系譜学はある出来事の背後に隠された動機を見つけようとはしないし、権力の連携や衝突を分析し、階級利害を見つけようともしない<sup>11</sup>。もちろん、イデオロギーを解釈し分析することで、背後に隠されている真の目的を救い出すということもない。ネオ・マルキスト流の考えの前提には、イデオロギーとは何か、どのように生産されるのか、権力はだれが所有し、どのように行使されるのか、ということがあった。系譜学はそれとはまったく違ったアプローチをとり、階級であれ、イデオロギーであれ、より基礎的あるいはリアルな存在レベルへの先験的還元を避けていることを特徴としている<sup>12</sup>。だから、階級利害やイデオロギーのヴェールを取り去った後に、救い出すべき真の原理が現れ出るわけではない。進歩のメタ物語メタストーリーが語られることもないし、リベラルからネオ・マルキストに至るまでの人々が抱く倫理的原理——それを「未完のプロジェクト」としての近代と言ってもよいかもしれない——にも組みしないし、「歴史」の終わりには必ず啓示や救済がおとずれるとは端から信じてはいない<sup>13</sup>。ディーンが言うには、系譜学がめざす歴史批判的指向の背後には、倫理的そして政治的な二つの原動力が折り合わされており、それは否定的にばかりではなく肯定的にも描くこと

ができるものである。一つは「診断的」なものであり、「現在の奇妙さを歴史における理性の必然的弁証法のもとでもみ消そうとする試み、あるいはそれを千年王国の到来の争い、大詰めあるいは避けることのできない破滅の時期として記す試みに対して、系譜学は現在の奇妙さへの認識を新たにする試みである。」もう一つは過去に関して「反時代錯誤的」なものである。それは過去を現在に向けて先行するもの、あるいは必然的なものとしてではなく、過去をそれ自身のことばで、言うならば「過去の異邦性」をつかもうとする試みである。たとえば「労働」、「資本」、「生産」、「流通」、「経済」などのことばは現在とはまったく異なる知識や語彙の形態に属しており、奇妙な地としての過去は現在の偶然性や単一性に対して意識を鋭くするものとなる<sup>14</sup>。

私たちの関心である「教育」や「学校」についても同じことが言えよう。教育にひきつけて繰り返して言うならば、近代公教育の背後に隠れている階級やイデオロギーのヴェールを剥ぎ取った後にやってくる歴史の救済を待ち望むこともないし、学校は倫理的原理を実現し、「真正な教育」が回復されるとのスタンスをとることもしない。また、そのことを端から信じてはいない。問われるべきことは、「教育」や「学校」がいかなる時点で、どのような要因から、どのように構成されたのか、ということである。「教育」や「学校」ということばはその起源を教育の大家ではなく、一見教育とは関係なさそうなできごとの内部で生みだされたのであり、それを辿る歴史的で経験的な細かな仕事は骨の折れる忍耐を要するものであるが、私たちが自明視していた歴史の継続性や断絶を疑問視するものであり、「教育」や「学校」ということばを再構成することで、現在の「教育」や「学校」の限界性と可能性を診断する途を拓くものである<sup>15</sup>。「教育」や「学校」の「歴史の異邦性」をつかむ試みは、歴史が「完全な自己実現」といった類の倫理的目的の実現へと直線的に、あるいは弁証法的に続くことを斥け、人に現在とは違ったように「教育」や「学校」を考えることを鼓舞することになる。だから、系譜学は「モダニスト理論の反歴史的約束 (promises) にも、普遍的価値の墓の上でのポストモダニストの死のダンスにも屈することはない<sup>16</sup>」という否定の綱渡りを演

じることになる。

### 統治の解析学 — 権力と知 —

ところでフーコーの言う統治とはもう少しかみ砕いて説明するとどうなるのか。ある目的のもと、さまざまな個人や機関が自らの行為と他者 — 国家や人口のような抽象的なものを含んでいる — の行為を変えるべく、権威を行使し、働きかけること、それを統治というのだが<sup>17</sup>、その際に、統治がいかになされるべきかという疑問が投げかけられ、統治が問題視される。統治の体制は過去、現在そして将来の可能性を疑問視することを伴っており、統治を問題視することは一般には「問題構成」と称されているが、統治の解析学は問題構成が生じるさまざまな特殊な条件を確定することをめざしている。すでに述べたように、統治の解析学は国家あるいは権力関係の一般的理論や理論的原理から出立するのではなく、そのような政治的アプリオリを斥け、まずもって統治活動が問題構成される特殊な条件や状況を確認し、その検討をすることから始められるのである。「統治の解析学は基底にある不変的なもの (unities) が継続した形をとった歴史を物語るものではなく、問題スペースを生じさせた多様な、ヘテロな、偶然的な条件を辿ることで、現在における問題スペースの自明性を解きほぐそうとしている。<sup>18</sup>」それはまさに「真理の歴史性と偶然性を暴露する<sup>19</sup>」試みであった。

統治が人間の行為をよくよく考え、そして指導する試みを含むものだとすれば、いかに統治するかについての計算になんらかの合理性を持ち込む試みであるとも言えよう。統治が必ず一種の合理性を伴った活動だとすれば、統治の解析学は統治に伴う観念 — それを知と言ってもよいであろうが、その特殊な知の形態がいかにして生みだされ、その知をもとに統治の体制がいかにして現れ、維持され、あるいはどのような条件のもとで変容していくのか — にその焦点が合わされている。言いかえれば、他者あるいは自己の行為に働きかけようとするある種の方法が可能となる条件にまずもって関心が向け

られている<sup>20</sup>。統治の体制はつねに問題構成に晒され、一種の合理性の形態が生みだされ、それをもとに統治のプログラム、戦略、戦術が編み上げられるのだが、その問題構成自体を再構築することをめざしているわけである。したがって、統治のプログラム、戦略、戦術は問題構成と関連づけて、あるいはまたそれが構築する知の体制、真理の体制、エートスと関連づけて分析されることになる。統治はそれが構成される目的や対象、それが見つけだす敵、私たちはだれであるか、存在のどのような側面が働きかけられるべきであるか、いかにして、どのような手段で統治がなされるべきか、自らを記述するのに用いる知やことばと関連づけて分析されることになる。さらには、私たちが統治する方法が、新たな知やことばを生みだす違った方法を生じさせるのであり、統治は新たな知やことばを生み出す実践を含んでいる、とも言えよう<sup>21</sup>。統治の行使は統治の対象、プロセス、人間に関する真理の体制——経済、社会、道徳、心理学、病理学——でとらわれており<sup>22</sup>、統治の解析は知識、真理の体制に関係しているといわれる所以でもある。統治の解析学は歴史的エピステモロジー、すなわち「ある時期に何を知識とし、あるカテゴリー、分類、関係、アイデンティティに特徴をもたせるものを生産することを許す、エピステモロジー的領域<sup>23</sup>」を再構築することをめざしているわけである。

統治性とは、さまざまなコンテクストのなかで他者や自分自身を統治することをいかに考えるか、ということである。とすれば、統治性あるいは問題構成という考え方の背後には、いかに考え、いかに疑問視するかということとはまったく自明なものではなく、必然でもない、ということがあった。私たちが疑問視することなく、自明なもののみなしているものごとのやり方は違ったように考えられ、違ったように知識の対象となり、問題構成のもとに置かれえる、という思考の可能性の試みとも言えよう。「歴史的研究は、現在の基礎そのものを形成しているものを掻き乱し、所与をもう一度奇妙なものにし、どうして自然なものともみえるようになったかを考えさせる<sup>24</sup>」ものであり、「時の金言、時代の精神、受容された叡智に刃向かう。自身の経験の形成へある種の不作法さを持ち込み、経験をコード化する物語の流ちょうさを遮



り、それらを口ごもらせる<sup>25</sup>」ものである。教育、学校、子どもあるいは自己の統治についても同じことが言えよう。

### 統治の解析学 ― 技法 ―

すでに触れたように、統治の背後には国家や階級という起源があるわけではないし、そこからすべてが流れ出してくるというわけでもない。したがって、統治の解析学は国家あるいは権力関係の一般的理論や理論的原理から出発するのではなく、あるいはまた意味を担っていることば、あるいは権威ある主体の意図を歴史的コンテキストのなかで復元し理解しようとするのではない。統治の解析学は統治活動が問題構成される個別の条件や状況をまづもって確定し、その検討をすることから始められる。統治の体制を作動させるためには、誰が、そして何が統治されるべきか、どのような問題が解決されるべきか、どのような目標がめざされるべきか、権威と服従との関係が統治空間のなかでいかに形づくられるのか、さまざまな場所や機関がいかにして相互に連携するのか、を刻記する必要がある。そのためには統治の体制のある種の可視形態をもって認識できるようにする必要がある。統治はしばしば国家や階級、あるいはイデオロギーへと帰されがちであるが、実際にはその多くは調査、証言の聴取、統計や図表の作成、地誌作成というような、あまり注目されることのない物理的技法に宿っており、それらの技法を介して統治されるべき領域は目に見える形に変えられた。技法としての統治を強調することのなかには、統治を階級やイデオロギーなどの表現としてみなすモデルに対する批判が含意されていることは言うまでもない。

個別具体的な時や場所で問題構成はなされ、そして物質的形態（統計、地図、図表など）を媒介として、現実には思考可能なものとなり、ひいては統治への途は拓かれることになる。統治は虚偽のイデオロギーを用いて遂行されるのではなく、統治主体は統治すべき問題や領域について疑問を投げかけ、知識や専門的知識を生みだし、それらを思考・理解可能なものにし、統治を

企てなければならない。だから、系譜学は存在しているものを、あるいはいかに実践がなされているかを単に叙述したり、分析することをめざしているわけではない。向かうべき課題は、統治においてはどのような思考、知識、戦略、あるいは合理性の形態が用いられているのか、それらの思考はいかにしてこれらの統治実践の変容を企図しているのか、いかにしてこれらの統治実践が知識を生み出すのか、ということである。統治と知識とのこの関連が、統治性 (governmentality) という造語で強調されていることである。

教育や学校は他者や自己の行為を変容させる試みであり、プロジェクトであるとすれば、教育や学校を問題構成し、教育に関することばや知を生み出したのは、理念やイデオロギーではなく、技法やメカニズムといったものである。教育や学校という統治の体制は調査や統計という物質的技法や知識の寄せ集めから構成されたものであると言えよう。とすれば、統治の解析学では、教育や学校はいかなる技法やメカニズムを介して問題構成され、そこに含まれているさまざまな異質な技法、分析、評価の格子はどのようなものであったか、またいかなる過程を介することで教育や学校は作動しているかを分析することが求められている。そして、私たちは、ほとんど目立つこともない日常のテキストや実践あるいは場所にこそ向かうべきなのかもしれない。歴史がつくられたのはほとんど注意を引かない小さな世俗的なレベルであり、後に正典となる多くのテキストはそのような小さな変容を後追いでコード化したものである<sup>26</sup>。思想家が教育言説を編み上げたのではなく、日常レベルで教育は問題構成されて、知識が形成されていったことになる。19世紀前半たいして洗練されていないテキストのなかで形成された教育言説、たとえば、コレラ撲滅のために貧民の棲む街路へと赴き調査に従事する人々の報告書、統計運動のなかで教育と犯罪、教育と貧困、教育と家族の生活との関係を議論する統計テキスト、枢密院教育委員会の視学官報告書などのなかで編み上げられた教育言説に見られる真理の主張が重要性を持つてくる。きわめて日常的な統治のなかで概念は編み上げられ、後には実験や比較研究などで理論化され精緻なものへとになっていく。きわめて平凡な日常のレヴェ

ルで、ことばと技法によって混沌とした世界たる「教育」が思考可能なものとなり、統治の対象として「教育」が構成され、統治プログラムへと途が拓かれてゆくことになる<sup>27</sup>。

## 統治の対象たる人口

ところで、統治はどのような歴史を辿ったのだろうか。西ヨーロッパでは、統治は家父長的所帯の静的モデルが支配的であり、絶対的主権 (sovereignty) の考えに従属しており、領土内の臣下に対する超越的な権威の行使であった。絶対的主権の行使は生殺与奪の権を通してのもので、強制的な法、法令、そして規制によるものであり、行為とものごとへの詳細な規制が強調されていた。またそれは産物、金、富、もの、サービス、労働そして血を控除するものであり、シンボルは剣であった。絶対的主権は、その対象あるいは一連の機関に内在する思考そして行動様式に従うというよりも、領域内で超越的なものであった<sup>28</sup>。

ところが、16世紀から18世紀にかけて、統治されるべき人やものごとの自然が考慮されるようになり、この過程で、ポリスの科学から国勢調査にいたるまでの統治の技法と言説は、ほとんど同時に新しい対象である人口 (population) を問題構成することになった。統治の領域や対象はかつては支配者に不透明であったが、ポリスや国家理性のなかで、統治の技法やことばが人口レベルでの生と労働のプロセスを明確で知的な形態で形づくるようになった。人口を構成しているものはもはやその君主に従属することを強いられている臣下でもないし、その領域内部の住人の総和でもなくなった。18世紀の末までには、人口自体が力と合理的傾向性をもつ独自の存在であり、人口は自らの習慣、歴史、労働形態、余暇をもち、生きて、働く、社会的存在として考えられるようになった。こうして統治は人口の社会的、経済的そして生物学的プロセスとの関連で考えられるようになり、18世紀の末には人口概念は統治の技法の精緻化と合理性の練り上げを可能とするキー概念になっ

た<sup>29</sup>。

人口レベルでの生の管理に関する政治こそ、フーコー言うところの生一政治 (bio-politics) である。人口は生と死、健康と病などのことからとの関連で定義づけられる。それは「18世紀に始まり、人口を構成する生きた人間のグループを特徴づける現象——健康、衛生、出生率、平均年齢、民族——によって統治実践に提示された問題を合理化する努力である。それは生と死、誕生と繁殖、肉体的ならびに精神的な健康と病気、人口の生を最大限にするのを維持したり、遅らせたりすることに関心を持っている。生一政治は、そのもとで人間が住み、生み、病気になり、健康を維持しあるいは健康になり、そして死ぬ、社会的、文化的、環境的、経済的そして地理的状态に関心を持たなければならない。このパースペクティブからは、生一政治は家族に、住居、生活そして労働条件に、言うところの「ライフスタイル」に、公的健康問題、移動パターン、経済成長と生活水準に関心を持つ。人間がそのなかで住んでいる生一領域に関心を持つ。<sup>30</sup>」統治は社会的、経済的、生物学的実在たる人口を育て、生計手段を増加させ、富と力そして国家の偉大さを増加させ、住人の幸せと繁栄を増し、その人数を増やすことをめざすようになったのである。絶対的主権は生に対する権力というよりも生殺与奪の権利として、控除によって作用したとすれば、国家理性とポリスは生きているものを育て、生を増加させることに関心をもっており、この意味で、統治は控除的なものではなく生産的なものである<sup>31</sup>。

人口は生一政治に対象を提供したわけだが、他方では、それは批判的な合理性としてのリベラリズムに統治を制限する論拠を提供することになったと言われている<sup>32</sup>。人口は政治的制度によって構成されるものではなく、フォーマルな権威制度の外部にある社会を通してリベラルに統治されるものであった。人口を対象としている生一政治の統治手段は強制的な法ではなく、人口についての知識は標準・ノルムのまわりの変数を特定することに関心を集中しており、人口や個人の内部の生にさえ見られる傾向性のようなものを強調しており、その統治では標準の適用をとおして人口の生を高めることをめざして

いた。言いかえれば「近代的」統治形態を形づくろうとするものであった<sup>33</sup>。こうして人口概念の登場と共に、統治の到達できない準自然的総体としての社会の形成と共に、統治は新たな敷居をまたぐことになった。

## 道徳的地誌

人口という概念が生一政治に対象を提供したわけであるが、人口という概念が生みだされるのは漸進的なプロセスであり、調査と統計の発展に多くを負っている。ここからは生一政治としての教育や学校がいかに関問題構成されたかを簡単に見ていくことにする<sup>34</sup>。繰り返しになるが、何らかの施策を施すためには、それ以前に「社会」問題が構成されていなければならなかったし、「教育」が問題構成されていなければならなかった。「社会」調査や「教育」調査が施策の立案に先行していなければならなかったのは、このためである。大衆の問題や生活が改善されるべきならば、何が統治されるべきなのか、誰が統治されるべきなのか、統治されるべき領域や対象がいかなるものであるかをまずもって情報や統計が表象する事実に基づいて明らかにされなければならなかった。この明証性のある確実な知識に基づいて、社会のあるべき方向性について一致した共通感覚が人々の間で生みだされる、と考えられていた。賢明なる統治は大衆の日々の生活についてのことばや統計に依拠しなくてはならないし、そのことが統治へと途を拓く条件であった。産業社会に住んでいる人々がこのことに最初に気づいたのが1830年代であった。教育に限っても、1816年の議会特別委員会を手始めに、1830年代には数度にわたり特別委員会が組織され、大部の報告書そして統計を残している。

この調査の嚆矢ともいえるべきものがジェームズ・ケイによるマンチェスターの労働者階級の調査であった。コレラを監視し撲滅するために、都市空間に対して格子状になった社会—医療ポリスの網をかけ、そのように分けられた地域に自らも先頭に立ち分け入り、ありとあらゆると言っても過言ではない情報や統計を収集することが試みられた。そのような調査を実施した

のはケイにとどまらなかった。医者や慈善家、警察や統計協会の調査員、勅任視学官などが先頭に立って、ある者は労働者階級の家々を一軒一軒訪ね歩き、またある者は学校を探しては視察し、書き入れるべき調査書を手にして教師や生徒の状態を記録して歩いた。こうして統治のために調査という膨大なしごとが着手され、統治の対象である人々や人々に関わるできごとが調査の対象とされ、私たちが理解できる形の情報や統計へと変換されていった。大衆のきわめてありふれた日々のできごと——出生、養育、教育、結婚、病氣、貧困、犯罪、死亡やその要因——はこれまで詳細な調査や記録に値しないと考えられてきたが、たいへん大がかりに調査がなされるようになり、大衆自身の証言も引き出され、できごとが数え上げられ、統計がつくられ、理解し易いようにグラフや表の形に変換され、都市空間の詳細な統計地誌がつくりあげられていった。

都市の空間は統計的に特徴づけられ、地図として描かれ、それ自身の特徴と結果を住民にもたらず領域として描かれ、道徳的地誌(moral topography)が形づくられるようになった。都市は境界と独自性を持っているものとして、そして住民への影響をもっている領域として刻記され、道徳的地誌が出現する。その結果、情報と知識を処理することで人口が問題として構成され、そこから社会問題が編み上げられ、その矯正戦略が出現することになったのである。こうして、大衆の生活を探查する新しい手だてが生み出され、ことばや数値を介して大衆のありふれた日々のできごとは思考・理解可能になり、大衆の生活を改善するための施策が導かれていった。「統計は、偶然をてなづけ、質的世界を情報にし、支配に適するようにし、分類分けをし、人々が自らをそしてその選択を考えられるようにし、支配機構と緊密に結びついている。<sup>35)</sup>」

## 教育の構成

19世紀には、社会統計は知識——死亡率、投獄の頻度、識字水準、国民生

産についての知識——をもたらすことになり、統治の前提となる知識を生み出すためのキーとなる様式となった。とくに教育は都市化、移民、犯罪、疾病などと関連させ、社会的視点でとらえられ、道徳領域として問題構成されていった。統計運動では教育は「道徳統計」として編み上げられ、しばしば犯罪と関係づけられ、その両者は関連性をもっているのか否かを巡って激しい議論の応酬がなされていた。道徳統計に典型的にみられるように、調査し、数値化し、書き入れ、図表そして陰影をつけた地図を作製するという、知的技法ともいうべきものを犯罪に適用することで、教育が問題として構成されていったのである。たとえば、結婚登録簿などから引き出されたさまざまな人口に関するデータを分析すると、総じて労働者の間では知育が不足していることがわかる。人々の移入によって影響を受けることが少ない種類の犯罪件数が割合としても多く、犯罪は道徳的頹廃を示すあらゆる指標を伴っていることも多く、また、知育の質が低い場合は法廷へと引き出される犯罪者の割合が多いことがわかる。この統計上の操作を介して犯罪は教育に結びつけられ、統治の新しい対象が現れたのである。統計処理を介して、望ましくない行動とそれが起きる頻度を「無知」あるいは低い識字率とに結びつけることのなかから、これらの行動を改善・矯正する手段としての国民教育が浮上してくるのである。調査によって人口——国民の生活と労働——に関する社会統計が収集され、それらが平均や標準からの逸脱という統計・数量スペースのなかに置かれることになった。その自然的帰結として、現実には数値によって分節化され、行政的関与へと現実を開くような形態で、知識は編み上げられていった。そのような領域のなかで、数量的と同時に社会的である標準からの逸脱を矯正する一連の手段として国民教育は考えられるようになったのである。

また、大衆の日々のできごとは標準化された形式で刻記され、ことばという形であれ、数値という形であれ、その刻記されたものが長い距離を、それも大量に運びこまれ、中心の場で集積され、積み上げられ、計算され、そして比較・分析されることになった。教区記録、国勢調査、調査報告が集めら

れ、調査の場所を遠く離れた中央の機関へと集積されるようになった。刻記と集積という中継プロセスを介して、統治を遂行しようとする人と統治の対象となる人との間に、権力の新たな導管が埋めこまれるようになった。統治の対象を標準化・数値化された形で刻記することは、そのことによって中央の機関を他の場所と結びつけるだけではなく、知識や情報の流れのなかで、それが中心を占めることで、統治機構を知識や情報の中心センターから運用することを可能とした。それはきわめてリベラルな統治方法であった<sup>36</sup>。

1839年には、イギリスの教育史上で画期をなすと言える、枢密院教育委員会が国庫補助金の分配を監視するために組織され、ケイが初代事務局長に就任することになった。そのもとに勅任視学官が置かれ、次第に人員を増やし、1850年には23名にも達した。当初はとくに決められた行政的責務がなかったこともあって、彼らは全国規模で各地域の教育状況や学校を視察し、その報告書をしたため、政策を方向づける情報や統計を多くもたらした。視学官は各地へ赴き、彼らの眼にはカオスとしてしか映らなかった労働者の社会をまったく怖れることなく、労働者階級の棲むところへと垂鉛をたらし、学校を訪ね歩いた。こうして人口のさまざまな文化的属性が知識の対象となり、統治への途を拓くことになった。彼らは19世紀の都市空間に対して監視・規制の格子をかけることをめざした統治テクノロジーの一員であり、彼らの活動を介して、社会問題が構成され、それらの問題が政治的・行政的管理へと開かれ、矯正的関心の対象となっていったのである。視学官制度は枢密院教育委員会のオフィスで中心を占める強力な統計・道徳管理メカニズムであった。彼らは教育あるいは学校を情報や統計として表象することによって、教育あるいは学校を社会問題として構成することに大きく寄与したばかりではなく、その情報を媒介としてリベラルな統治を遂行していった。もはや教育は神意によって定められた運命ではなく、それ自身の特性、法則ともいうものを内在しており、それを析出することで、教育は思考し動かすことができる対象となり、改革が可能となる、とする信念が次第に受け入れられていったのである。教育あるいは学校という領域を統治するためには、その領域内



の内在的法則と条件が明らかになり、意識的な計算ができるような形式で表象されることが必要である。このことによって、教育や学校は思考可能なものとなり、ひいては統治可能なものとなる。それも国家による詳細な規制ではなく、その自然に基づいたリベラルな統治であった。

- 1 Andy Green, *Education and State Formation: The Rise of Education Systems in England, France and the USA*, 1990.
- 2 *Letter to N. Senior* (1837), quoted, in *ibid.*, p.251.
- 3 Andy Green, *op. cit.*, p.256.
- 4 *Ibid.*, p.258.
- 5 Quoted in Brian Simon, *Studies in the History of Education 1780-1870*, 1960, p.259, 成田克矢訳『イギリス教育史 I 1780-1870年——二つの国民と教育の構成』亜紀書房, 1977年, 309頁。
- 6 「ことばの教育, 暗記, 記憶詰め込みシステムが依然として教育の名前でもったいをつけられて呼ばれている。最大のがらくたをため込んだ人は最大の「学徒」として評価されている。このことが理解されると, 学徒が実際的なあるいは有用な知識をまったくもっていないこと, 理性を用いることがまったくできないことを不思議がるべきである。」(Quoted in Brian Simon, *op. cit.*, p.262, 前掲訳書, 313頁。)
- 7 Andy Green, *op. cit.*, p.259.
- 8 この種の典型として次のような著作を挙げることができる。Raymond Williams, *The Long Revolution*, 1961 (若松繁信, 妹尾剛光, 長谷川光昭訳『長い革命』ミネルヴァ書房, 1983年), E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, London, 1963 (市橋秀夫, 芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社, 2003年), Brian Simon, *op. cit.*, R. Dale, G. Esland and M. MacDonald (eds.), *Schooling and Capitalism*, 1976, Education Group (Centre for Contemporary Cultural Studies), *Unpopular Education: Schooling and Social Democracy in England since 1944*, London, 1981. このような「批判的」教育史に対する系譜学的批判としては, Ian Hunter, *Culture, Bureaucracy and the History of Popular Education*, and *The Pastoral Bureaucracy: towards a less principled understanding of state schooling*, in Denise Meredyth & Deborah Tyler, *Child and Citizen; genealogies of schooling and subjectivity*, 1993, Ian Hunter, *Rethinking the school*, 1994がある。ここではハンターの著作に多くを負っている。
- 9 ジョンソンは労働者階級に固有な自立的教育形態と理論についてこう言っている。

「これらの活動はラディカル活動の偶然の副産物ではなかった。それらは運動自体に固有のものであった。とくにチャーティストやオーエナイトは, グラムシが現代の「ジャコバン」や教育家としてイタリア共産主義のためにそれを渴望したのと同様に, 教育——「本当に役立つ知識」——を渴望した。」(Richard Johnson, *Notes on the schooling of the English working class, 1780-1850*, in

Roger Dale, Geoff Esland and Madeleine MacDonald (ed.), *Schooling and Capitalism*, 1976. p.50. 傍点強調は原文ではイタリック。)

ジョンソンの一連の著作はその種の歴史で最も高く評価されるべきものであろう。現在という地点から振り返ってみると、倫理的原理という目的を歴史に埋め込もうとする強いスタンスが70年代に隆盛を見たのも、時代の雰囲気がそうさせた面も大きかったのであろう。

- 10 ジョンソンは19世紀のブルーブックをはじめとする史料の読み方を鮮やかな手口で見せてくれているが、グラムシ流のイデオロギー概念がそこで大きな役割を果たしている。Richard Johnson, *Elementary Education: The Education of the Poorer Classes*, in Gillian Sutherland and others, *Education in Britain*, 1977.
- 11 この章を書くのに以下の二書に多くを負っている。Nikolas Rose, *Powers of Freedom*, 1999, Mitchell Dean, *Governmentality: Power and Rule in Modern Society*, 1999.
- 12 Mitchell Dean, *op. cit.*, p.22.
- 13 *Ibid.*, pp.43-44.
- 14 *Ibid.*
- 15 *Ibid.*
- 16 *Ibid.*, p.46.
- 17 Michel Foucault, *Governmentality*, in Graham Burchell, Colin Gordon and Peter Miller (eds.), *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*, 1991.
- 18 Nikolas Rose, *op. cit.*, p.275.
- 19 *Ibid.*, p.277.
- 20 *Ibid.*, chapter 1.
- 21 Mitchell Dean, *op. cit.*, p.18, Nikolas Rose, *op. cit.*, p.56.
- 22 Nikolas Rose, *op. cit.*, pp.28-30.
- 23 *Ibid.*, p.29.
- 24 *Ibid.*, p.58.
- 25 *Ibid.*, p.20.
- 26 *Ibid.*, p.11.
- 27 *Ibid.*, pp.30-31.
- 28 絶対的主権 — 規律 (discipline) — 統治は社会の継起的タイプではなく、トライアングルを形成し、その主要な目標は人口とその不可欠なメカニズムであった。(Mitchell Dean, *op. cit.*, p.202.)
- 29 *Ibid.*, pp.93-95.
- 30 *Ibid.*, p.99.
- 31 ドイツのポリス科学では生 — 政治的関心をテーマにしており、統治の技能は人口レヴェルでの生を育てることをめざしていた。また、人口はその一般的福祉と生に寄与したり、阻止したりするサブ・グループへと分けられる。貧民や犯罪者への階層分け、またその内部での階層分け (the criminal and dangerous classes, the feeble-minded and the imbecile, the invert and the degenerate, the unemployable and the abnormal) がなされる。家族はダイナミックな力の領域、すなわち人口内部での一要素となる。家族もまた統治自体のアプリオリというよりは、統治の手段や目標として考慮すべきものとして構成される (*Ibid.*, p.100.)

- 32 *Ibid.*, pp.107-8.
- 33 *Ibid.*, p.102.
- 34 拙稿「19世紀前半のイギリス教育史の予備的考察——統治と統計——」『小樽商科大学 人文研究』110 輯, 「統治とケイの活動——19世紀における国民教育論出現の可能性の条件——」『小樽商科大学 人文研究』111 輯, 「道徳統計を介した教育の問題構成」『小樽商科大学 人文研究』113 輯, 「19世紀前半の統計協会と勅任視学官による教育調査」『小樽商科大学 人文研究』114 輯, 「教育統計はどのように解釈されてきたか——19世紀英国における統計協会の教育調査をめぐって」『小樽商科大学 人文研究』115 輯は生—政治の視点から教育や学校の問題構成を検討したものである。
- 35 Nikolas Rose, *op. cit.*, p.203. たとえば, 就学率や犯罪率や罹病率の知識は, 子どもや犯罪者や病人が一カ所に集められ, 画一的な観察手法に服するようにさせる統治装置なくしては, あるいは確率の計算技術なくしては生まれることはなかったのである。その意味で, 統治は知の生みの親である。
- 36 *Ibid.*